

# 人のとらなりに

しづた  
田 かつみさん (48)

看護師として勤務し、自身も子育てをしながら、不登校や子育てに悩む人たちが語り合える場として、「だんで会」を提供する澁田さん。  
今回は、そんなサークル「だんで会」のおん」代表の思いに寄り添います。

だんでらいおん連絡先  
☎050(5579)6285

「人のとらなりに」とは…

文字通り、その人の隣にいて、思いに寄り添うことや人柄を表す言葉「人とらなり」をイメージした新コーナーで、人物や活動の紹介だけでなく、その人の思いにスポットを当てることを目的としています。

## 自身が不登校の子を持つ体験者

私の息子は現在、中学3年生です。平成28年の4月、小学4年生の時に福岡県から転入してきたしばらくしてスタートした不登校歴は、もう6年目となります。

小学4年生から6年生までは、始良市蒲生町にある「森の学校 楠学園」というフリースクールへ在籍していました。ここでの出来事全ては、親子共に国内外の方々と多くのご縁もあり、素晴らしい経験となりました。

## 学園やメンバーとの出会いが変えてくれた肯定感

当初、私は、不登校の子を持つ親として、相談できる場所がなく、自分自身を責め、子どもとの向き合い方に悩み、苦しい時間を過ごしていました。

そんな時に出会った楠学園で、子どもたちの個性に合った学びの形を知り、広報薩摩川内を目にして参加した「びあ保護者会」では、同じ不登校の子どもたちを持つ親同士が、いろいろな思いを吐き出すことができ、皆さんとのつながりもできました。そうした中で、責めていた自分を初めて肯定することができるようになりました。

そして、「学校に行かない子は弱い子」という固定観念に縛

られていた私自身が変わることで、自らも苦しみ、葛藤しながら、勇気を持って行かないことを選択した息子と、本当の意味で対話ができるようになりました。

## 「一人じゃない」サークル「だんでらいおん」が作りたいのは、保護者と子どもたちが安心できる居場所

皆さんと話をする中で、まずは親自身が元気になる事が一番だと感じました。そして、私を含む保護者の安心できる「居場所」を作りたいという思いで、びあ保護者会に常日頃から参加していた方たちへ声を掛け、平成30年の8月にサークル「だんでらいおん」を立ち上げました。サークル名の「だんでらいおん」は、「たんぼぼ」という意味で、「居場所」であることから、それぞれが綿毛となり、それぞれの降り立った所で花咲かせるという思いを込めて、名付けました。

## 私はきっかけだけメンバー全員が代表です

私たちのサークルは、メンバー全員が同じ境遇で子育てに悩む経験者であることが一番の強みです。私はきっかけを作っただけで、メンバーのみんなで作上げ、それぞれが代表として、思いを込めて活動しています。

だんでらいおんは、これからも不登校や子育てに悩む全ての

人や、さまざまな思いを抱えている方々のより所でありたいと強く思います。



▲過去の活動の様子。現在はオンラインでの相談受け付けなどをメインに活動しています。

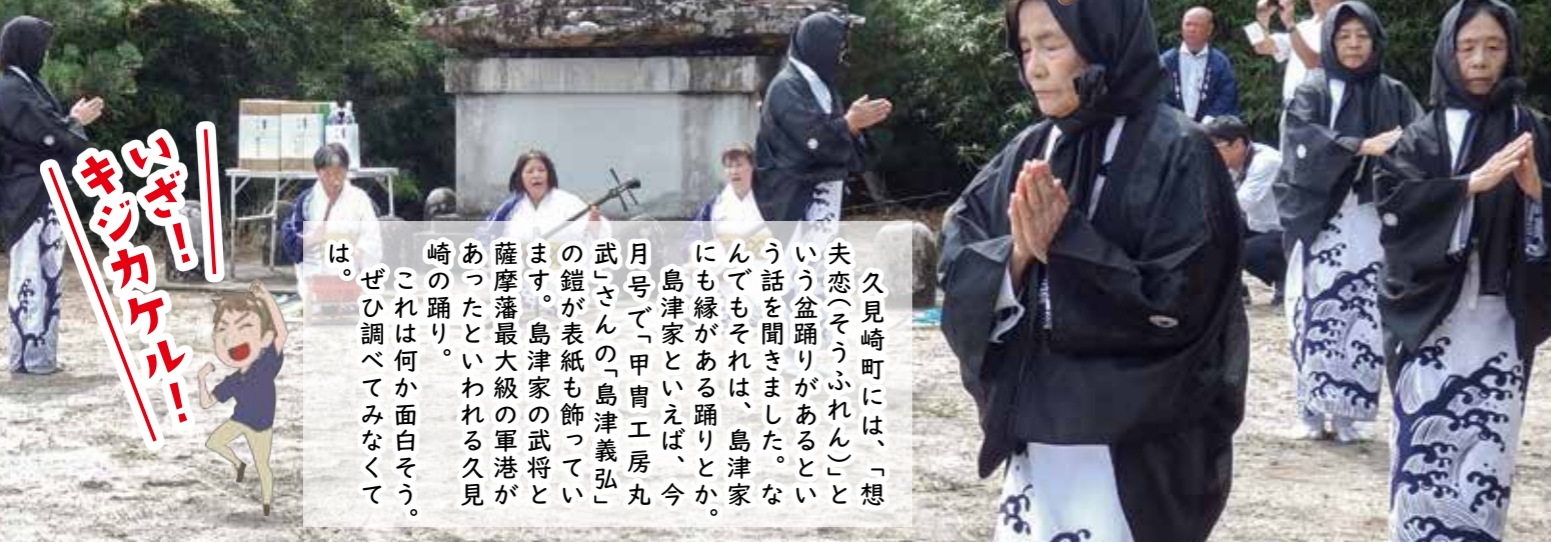
## 一人の親として我が子への思い

息子には、将来、自分の望む好きな事を仕事にしてほしいと願っています。

それだけでは生活にならないことも、時には嫌なこともあると思いますが、ベースに好きな事があれば、困難も乗り越えられると思います。

そのための忍耐であったり、集団生活の大事さだったり、そのためには何をしたらいいのかという視点での学びや経験を積んでほしい。

そして今、選択し経験していることと同じで、自分を大事にできることを一番に考えてほしい。どんなことでも今この瞬間を一生懸命に生きることにそれが、きっと過去へも未来へもつながっていくはずだから。



久見崎町には、「想夫恋(そうふれん)」という盆踊りがあるという話を聞きました。なんでもそれは、島津家にも縁がある踊りとか島津家といえば、今月号で「甲冑工房丸武」さんの「島津義弘」の鎧が表紙も飾っています。島津家の武将と薩摩藩最大級の軍港があったといわれる久見崎の踊り。これは何か面白そう。ぜひ調べてみてください。

## いざ 滄浪地区へ

想夫恋を調査しようとして久見崎町にある滄浪地区コミュニティセンターを訪ねると、想夫恋は、ここ2、3年は新型コロナウイルス感染症の影響で実施されていないことがわかりました。でも、その代わりに会場を案内いただき、写真や資料などをいただくことができました。

## 想夫恋の発祥

今から、約420年前の慶長の役の際、豊臣秀吉の命令の下、朝鮮半島へ向け、島津義弘率いる軍勢1万余りの兵が、当時薩摩の軍港であった久見崎から出陣し、方々の戦いで大いに奮戦しました。

そして、翌年の8月、秀吉の死去によって終戦を迎えると、多くの犠牲者を出しながらも生き残った将士が久見崎へ帰ってきました。

久見崎港では、島津の「丸に十字」の旗印を付けた船を迎えるため、多くの家族が海岸に集まりました。一説には、その時の様子



「見えた見えたよ 久見崎沖に 丸に十字の旗が見えた」というのが、鹿児島おはら節の原型であるといわれています。

しかし、帰国の知らせを聞いて久見崎へ集まっていた家族の中には、我が父、兄弟、子どもの姿を見いだせない家族もたくさんあったそうです。

時はたち、この戦いで戦病死した敵味方の霊を慰めるために、毎年旧暦の7月14日、現在の8月16日に盛大な慰霊祭を行うようになりました。

その時、地元の未亡人たちが踊った踊りが、その名も優しい今の想夫恋の元になったといわれています。



## 想夫恋 それは戦死した帰らぬ家族を思う歌と踊り

想夫恋は、お高祖頭巾で「面」を包み、男物の紋付羽織に背中に脇差し姿。三味線と太鼓に合わせて輪を描きながら踊ります。

何かを招き寄せる手ぶり、時々手のひらを合わせて祈り、ゆっくりとしたテンポで



皆さんが知りたいことや紹介したいことなどがありましたら、情報をお寄せください。  
問合せ／本庁広報室広聴広報G(内線632)